

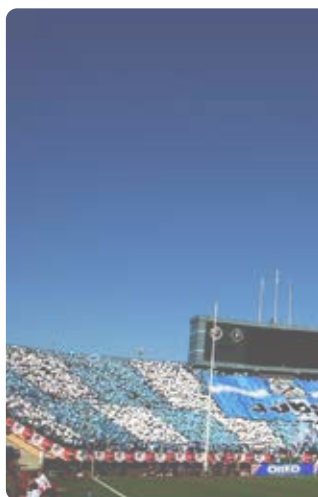


ジュビロがいて、わたしがあ

ジュビロで喜んだ年
ジュビロで悲しんだ年
30年間、私たちのそばには
いつもジュビロがあった



今までも
そして、これからも
ずっとジュビロと共に



国内タイトル

- J1 リーグ
年間3回 (1997,1999,2002)
1stステージ4回(1998,1999,2001,2002)
2ndステージ2回 (1997,2002)

- J2 リーグ 1回 (2021)
- Jリーグカップ2回 (1998,2010)
- 天皇杯 1回 (2003)
- スーパーカップ 3回 (2000,2003,2004)

国際タイトル

- アジアクラブ選手権 (1998)
- アジアスーパーカップ (1999)

写真協力: ジュビロ磐田

旧東海道見付宿 商店会

見付あきんど組

市内には、ジュビロ磐田のホームゲームがある日に軒先などへジュビロフラッグを掲げている商店が数多くある。商店が立ち並ぶ旧東海道の見付宿場通りでは、約1キロにわたって街路灯にジュビロ磐田のフラッグが常に掲出されている。見付地区の3商店会で行く「あきんど組」の代表代行である金子さん（写真・右から2人目）は「ジュビロのJリーグ昇格時か



見付宿場通りに掲げられているジュビロ磐田のフラッグ

ら商店街でフラッグを掲げるようになりました。このフラッグを見て、ジュビロを観戦する人が少しでも多くなればと思います」と話す。

ジュビロ磐田が根付く街、磐田市。試合があった次の日にはいつもジュビロ磐田の話題がある。「試合の次の日には、来店してくれたお客さんや地域の人と『昨日ジュビロ勝ったね』という会話が日常的にあります。それはもう当たり前になってしまったけど、すごいことだなと思います」

今日も見付宿場通りには、サックスブルーの空の下、ジュビロフラッグが掲げられている。「僕はフラッグを付け替えたり、ポスターを貼ることぐらいしか出来ないけど、これからも当たり前前に応援していきます」

わたしたちの30年

ジュビロスポーツボランティア

たつなり
鈴木 達也 さん

清掃やチケット確認、座席案内など、ホームで行われるジュビロ磐田の試合は、多くのボランティアによって支えられている。長年ボランティアを続けている鈴木さんもその一人だ。「96年からボランティアを続けています。現在は、運営委員長として、当日のボランティアの配置などを行っています」

鈴木さんも、元々は長年のジュビロサポーター。「子ども



がサッカー好きなこともあり、一緒に試合を観ている中で、気づいたらサポーターになっていましたね」

ジュビロ磐田を応援し続ける中、このチームを支える側に立ちたいと思ったという。「地元にあるチームなので、支えることができたかと思っていたところ、ボランティア募集の案内があったので応募しました」

鈴木さんは長年サポーターとしてボランティアという形でジュビロ磐田を応援し、チームが苦難のときも一緒に過ごしてきた。「人間と同じようにチームも落ち込む時期もあります。そんなときこそ支えながら、応援し続けたいと思っています」鈴木さんの日常はジュビロ磐田とともにある。「ジュビロの試合日程を軸に、日々のスケジュールを立てています。もう長年なので、これが当たり前になりました」



▲ボランティア
ホームページ

ULTRA' IWATA

中澤 武志 さん

サポーター団体の一つである「ULTRA' IWATA」に所属する中澤さん。試合では、コーラーとして声を枯らしながら選手たちを鼓舞する。「もともとサッカーが好きで、ジュビロ磐田の前身のヤマハ発動機サッカー部時代からずっと応援しています」と語る。

試合中、ジュビロ磐田が得点するとスタジアム全体が活気づく。しかし、中澤さんはジュビ



ゴール裏にはいつもジュビロサポーターの大声援がある

ロ磐田の戦況が厳しいときに一番力を入れるという。「僕たちは選手たちに盛り上げてもらうんじゃない、選手たちを盛り上げる役だと思っています。だから、ここぞというときに僕たちが選手たちを鼓舞して、得点を取らせるんだという気持ちです」

中澤さんは、コーラーリーダーとして、ホームの試合はもちろん、アウェイの試合も駆けつける。「ジュビロは、生活であり、切っても切れない存在です。今回のJ1昇格のときも、職場や近所の方々から自分は選手じゃないのに『おめでとう！』と言ってもらいました」
来シーズンも、ゴール裏から中澤さんの声がジュビロ磐田の選手たちを鼓舞する。

ジュビロと共に歩んだ

ジュビロサポーター

鈴木さん家族

ジュビロ磐田の試合は、家族団欒だんらんのきっかけにもなっている。市内在住の鈴木さん家族は、3世代でジュビロサポーターだ。「父の影響で物心ついたときにはスタジアムで応援していました」と亜美さん（上写真…前列右端）は話す。

鈴木さん家族は、年5〜10試合をスタジアムで観戦し、スタジアムに行けないときは家族で集まり、一緒に応援する。「ジュ



ビロの試合は家族が集まるきっかけになっています。喜びや感動が共有できるので関係も一層深まる気がします」

亜美さんの2人のお子さんも、今ではすっかりジュビロサポーター。実際にサッカーも始めた。「初めはスタジアムの非日常的なワクワク感から好きになったようです。今は古川選手のドリブルに魅了されています」

J1昇格から30年。歓喜の瞬間もあれば、苦難の瞬間もあった。亜美さんの父（上写真…後列右）、松島洋臣さんは「J1優勝など良いシーズンがあったからこそ、悪いときであっても必ずサポーターに伝えてくれると信じて応援しています」と話した。



3世代で集まり、テレビの前でジュビロを応援する

We Return To J1



ジュビロ磐田 山田 大記 選手



ジュビロ磐田がJリーグ昇格30周年を迎えた昨シーズンに、J1昇格という結果を掴み取ることができ、嬉しく思っております。

まずは、ファン・サポーターの皆さま、パートナー企業の皆さま、磐田市民をはじめとする地域の皆さま、いつも多大なるサポートをありがとうございます。この昇格はクラブだけでなく、皆さまのサポートがあったからこそ掴み取ることができた結果だと思っています。僕自身もこんなに劇的な昇格というのは経験したことがなかったので、最終節の栃木戦では人生で初めて嬉し泣きしてしまいました。

昨シーズンは難しい状況の中ですが、J1を戦う上でまだまだ足りないところがたくさんあるのは、横内監督はじめ選手全員が自覚しています。

ただ、強度の部分や攻撃のバリエーションなど、積み上げてきたものには手応えを感じています。開幕戦までもっと成長して、自分たちが積み上げてきたものに自信を持って、J1の舞台に臨みたいと思います。今季も自分たちを信じて努力し続け、必ず前に進んでいきます。これからもジュビロ磐田への熱い応援をよろしくお願いたします。



ジュビロがいて わたしがある

これからも ジュビロと共に

今回、ジュビロ磐田を長年応援している4組の方に、ジュビロ磐田への思いを聞いた。この4組に共通していることは、「ジュビロはわたしの『日常』ということだった。フラッグを掲げたり、ボランティアをしたり、アウェイまで駆けつけたり、家族と家で応援をしたり。それは、わたしたちにとって特別であり、日常だ。そして、この日常で生活する子どもたちは、プロスポーツを身近に感じ、夢を

もち、選手としてプレーする子もいるだろう。30年間、歓喜の瞬間もあれば、苦難のときもあった。30年間のジュビロ磐田の歴史があり、今のわたしたちがある。Jリーグ昇格31年目の今シーズン。きつともうれしいことも悲しいこともあるだろう。それでも、この先わたしたちが「ジュビロ磐田を応援すること」は変わらない。それは、わたしたちにとって「日常」だから。